

[キュウリ用隔離栽培システムの開発と生育管理技術の確立]
キュウリ用ベンチ型隔離ベッドにおける雨よけトマトの栽培適性および品種比較

野口 貴・海保富士男・沼尻勝人
(園芸技術科)

【要 約】ベンチ型隔離ベッドでキュウリの後に雨よけトマトを栽培することができる。供試5品種の中で可販果収量が高いのは「アニモ TY12」、次いで「桃太郎ファイト」である。尻腐果の発生を抑えられれば可販果収量を高めることができる。

【目 的】

これまで、小規模栽培向けの低コストベンチ栽培技術の開発を進めてきたが、より実用的なものとするためにはトマトなど、他の果菜類への汎用性が必要となる。そこで、キュウリの後作としての雨よけトマトの品種検討を行い、技術確立のための資料とする。

【方 法】

2013年2月4日にトマト「桃太郎さくら」以下5品種を播種し、ココピート培地でポット育苗後、3月31日に隔離ベッドに定植した。培地は、2012年に半促成キュウリおよび抑制キュウリを栽培したヤシ殻(ココユーキ)をそのまま用いた。定植後、振り分け誘引し、株間40cm、2条の栽植(216株/100m²)とした。主枝は9段果房の上の葉2枚を残して摘心し、収量調査は8段果房までとした。肥料はタンクミックスA&Bを生育にステージに応じて定量を施用した。区制は1区6株の2反復とした。

【成果の概要】

1. 肥料は、表1に示す施肥モデルを基本とし、生育ステージに応じて量的施用したが、前作の残肥があったことから、第3花房開花までは施用しなかった。一方、生育後期には、施用量が多くなり、栽培終了時点での総施用量はモデルよりも多くなった。
2. 供試した5品種の規格別収穫果数をみると、販売可能な可販果(A品+B品)は、「アニモTY12」で多く、次いで「桃太郎ファイト」となった(図1)。一方、「秀麗、アニモTY10」は尻腐果の発生が多く、可販果の減少を招いた。「桃太郎さくら」は草勢が弱く、全果数が少なかった。
3. 果房毎の規格別収量をみると、「アニモTY12」は比較的安定して可販果がみられた(図2)。「桃太郎ファイト」は果房毎の変動が大きかった。
4. 尻腐果は、いずれの品種も全果房に発生していたが、「アニモTY12」は各果房で少なく、「桃太郎ファイト」は上位果房ほど少なくなる傾向にあった(図2)。
5. 可販果の1果重をみると、「アニモTY12」は120~180gの間で変動が小さく、「桃太郎ファイト」は低段で180g、上段で140g程度であった(図3)。
6. 各品種とも収穫期は概ね5月下旬からで、ピークは7月中旬となった(図4)。
7. まとめ:キュウリの後作として雨よけ栽培でトマト5品種を比較した結果、「アニモTY12」や「桃太郎ファイト」で比較的多くの可販果を得ることができ、本栽培システムはトマトにも利用可能であることが明らかになった。ただし、全体的に尻腐果が多かったことから、灌水管理等を適正化し、可販果率を高める必要がある。

表1 株あたり日あたり施肥量のモデルと実績値

生育ステージ	施肥モデル			実績値		
	窒素量 (mg)	該当 日数	液肥 (mL)	窒素量 (mg)	該当 日数	液肥 (mL)
定植～	30	15	1.9	0	18	0.0
第2花房開花～	50	15	3.9	0	12	0.0
第3花房開花～	100	24	7.7	86	14	6.6
第5花房開花～	140	17	11.0	131	10	10.1
第1果房収穫～	90	20	6.2	131	33	10.1
第3果房収穫～	50	12	3.9	120	8	9.2
第4果房収穫～	30	20	2.3	62	16	4.8
第6果房収穫～	0		0.0	54	11	4.2
総窒素量(mg)/株	8,980			9,383		

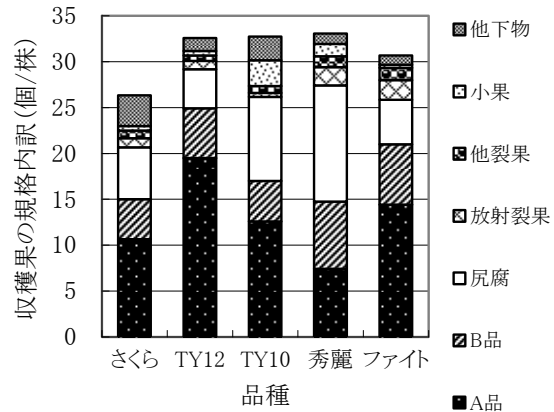


図1 供試品種の規格別収穫果数

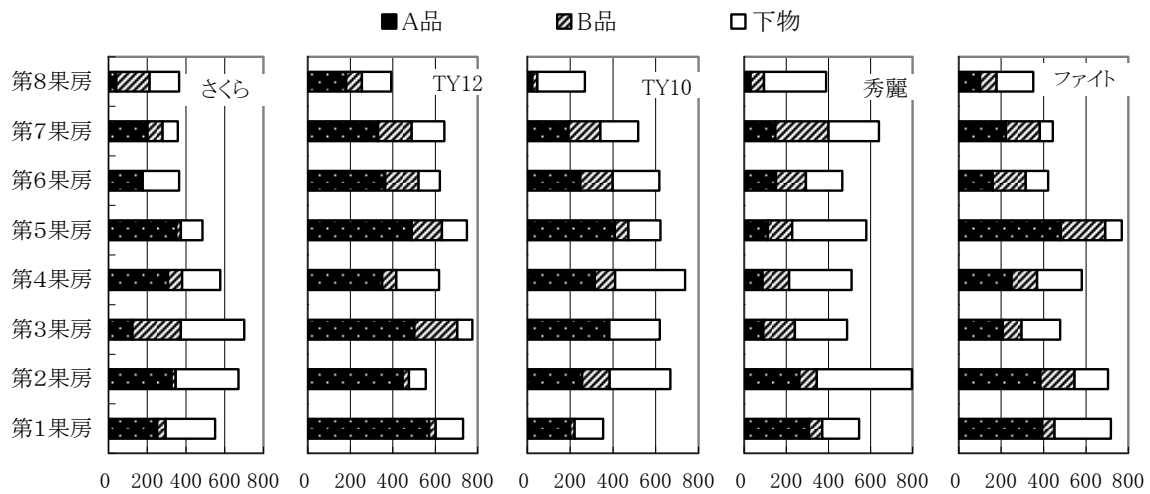


図2 供試品種の果房別収穫重(g/株)

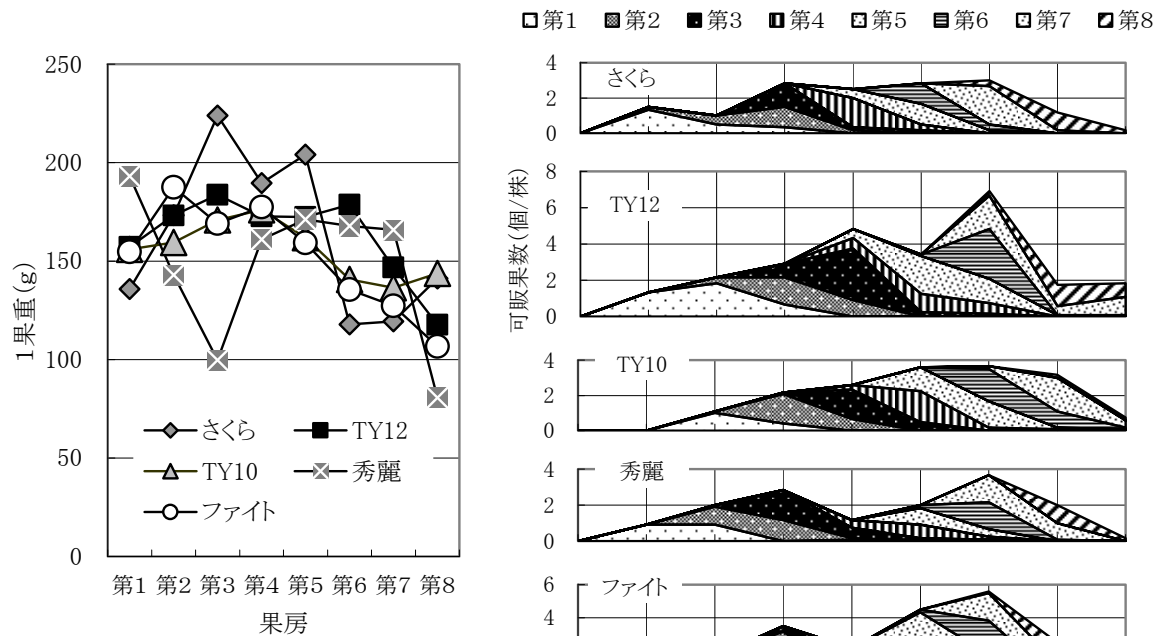


図3 供試品種の果房別1果重

図4 供試品種の旬別果房別可販果数